みる つくる かたる

千葉県立美術館報

VOL. 8 NO. 1

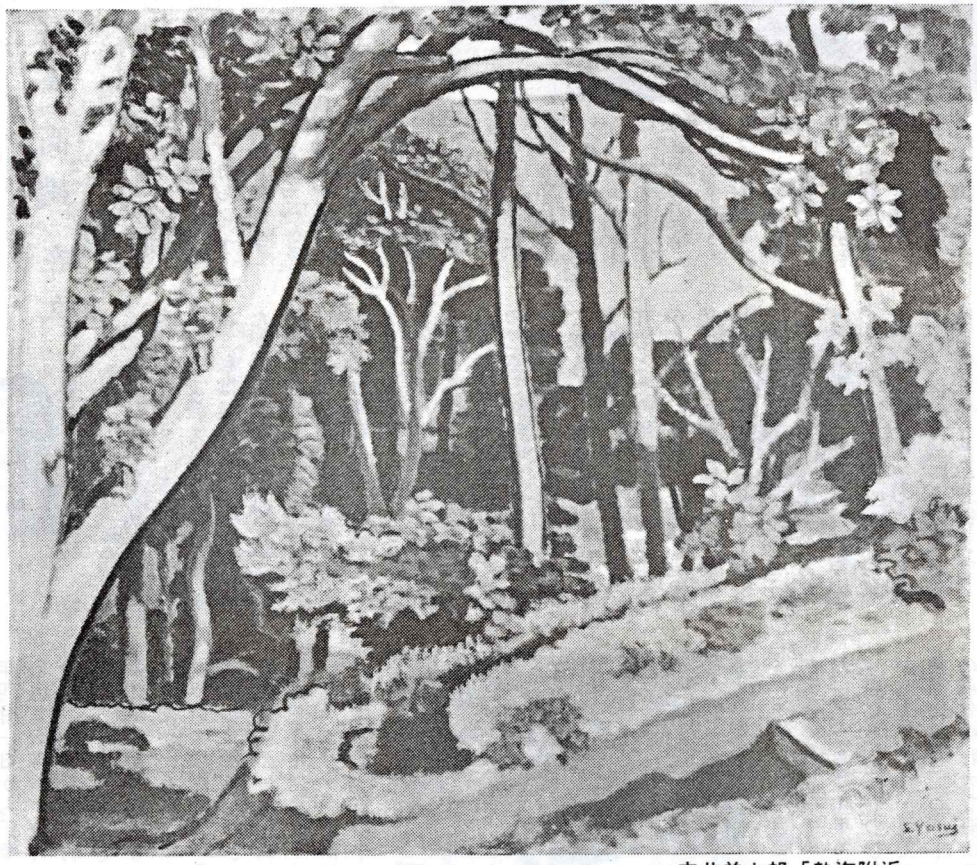
（通巻 30号）

昭和56年5月25日発行

編集・発行人 高橋 在久

千葉県立
56. 5. 25
美術館

〒260
千葉市中央港1丁目10番1号
☎ 0472—42—8311（代表）



安井曽太郎「熱海附近」

観潮台

埋立地突端の海に面した美術館の立地は全国的に見ても珍しい。かつては砂漠の中の美術館などと陰口をたたかれたこともあったが周辺が徐々に整備されるにつれて広い空間をもっていることがかえって憩いの場にもなってきた。

昨年度から美術館の敷地に接続して臨港公園の造成がはじめられている。この公園の面積はおよそ二十七ヘクタールを予定しているとのことである。わかりやすくいえば横浜の山下公園の約三倍、後楽園球場の二十四倍の広さに相当する。経済大国日本が西欧先進国に比べて遅れているものとして公園、下水道、道路、文化施設などの公共施設の未整備が指摘される。臨港公園の中には広い屋外ステージを中心にして洋風の築山、植込の中に遊歩道が設けられることになっている。完成年度は昭和六十年を目途にしているとのことだが、できあがれば、この大公園の核は美術館となる。

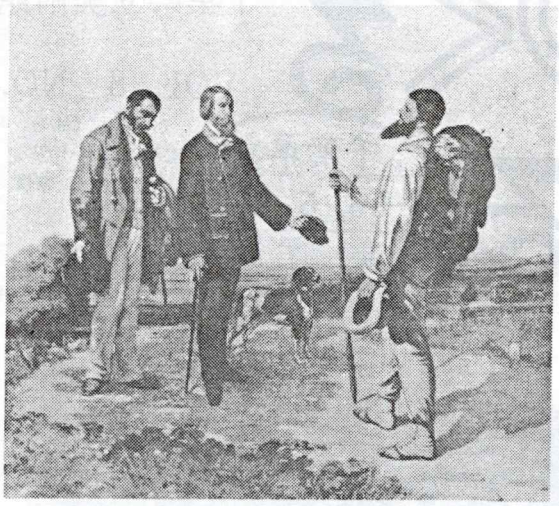
海と緑を背景とした美の殿堂となる日が待ち遠しい。

（安増 順）

クールベさん今日は

館長　高橋　在久

ジャン・デジレ・ギュスターヴ・クールベさん今日は。私は「みる・かたる・つくる」千葉県立美術館の館長です。十九世紀人のあなたにはお会いできませんでしたが、一九八一年春の現在、不思議な因縁であなたを強く意識してから半年を迎えようとしています。あなたの一八五四年の作品に「今日はクールベさん」と呼ばれている一枚の肖像画群があり、いま、あなたの友人で後援者だったブリュイヤスゆかりの地中海沿いの大学都市モンペリエにあるファーブル美術館に保存されております。画家としてのあなたの自信あふれた明るい色彩の作品ですが、ちょうどこの「今日はクールベさん」であなたを出迎えたブリュイヤスのような心情を抱きながら、私はあなたが十九世紀フランスの、写実主義の代表的な画家だと仰いでいます。

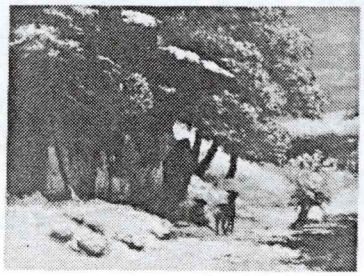


ギュスタヴ・クールベ「今日はクールベさん」

このことは岩波新書の坂崎担著『クールベ』を五年ほど前に読んで教えられておりました。私は美術史の門外漢でしたが七年前に美術館の経営に参画してから、一応日本を軸にした美術史の学習を始め、必要な個別研究書の通読をしてきた結果でした。

クールベさん、東京湾に臨む私たちの千葉県立美術館では、公立地域美術館として次の三点を資料収集の重点にあげています。㈠千葉県佐倉市で成人し、日本近代洋画界の先駆的巨匠と仰がれている浅井忠とその師弟や周辺の作家の作品、㈡日本の近代と現代美術界に足跡を残した千葉県ゆかりの作家の作品と千葉県にゆかりの深い作品、㈢こうした日本の作家に関連がありまた影響を与えた外国の作家の作品、など多種多彩な対象を、歴史的な系譜や価値を慎重に考えながら所蔵作品の充実と個性化を急いでいます。

クールベさん、幸いなことにはこうした千葉県立美術館の方針の基礎には、一九八〇年四月一日から千葉県美術品取得基金条例が施行されています。従って歴史的に価値が高く、しかも緊急を要する作品の取得が可能になりました。あなたが一八六九年に制作しフランスの画商デュラン・リュエルが所有し、さらにあなたの死後の一九〇六年から一九七三年までニューヨークのメトロポリタン美術館に収蔵されていた「雪の中の小鹿」を一九八一年一月に購入したのもこんな環境でのことでした。私たちは昨年の暮れから「眼に見えるものしか描かない」といわれ、現実の社会や風景に美を認め、平凡な巷間の事象や壮大な海山の風景を描いたあなたの画業が、私たちの千葉県立美術館が重点にしている浅井忠の日本的リアリズムと評価のある現実の農村や漁村の風景や人物を生き生きと描いた画風と常に比肩されていることに着目し、浅井忠の近代的画業の性格を国際的に理解し評価する上であなたの作品は欠かせないと判断したからです。



雪の中の小鹿（本館蔵）

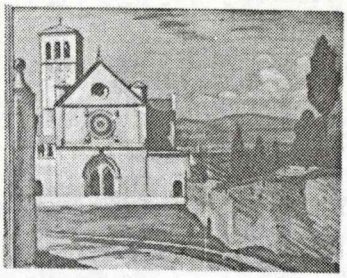
クールベさん、あなたは自作の「雪の中の小鹿」が日本の一地域美術館に収蔵されたとお知りになったら、おそらく奇異を感じられるかもしれませんが、私たちの視点はさきにあげましたように、あなたの画業が私たちの千葉県立美術館のシンボル浅井忠と関連が深いからであります。しかもいまの私たちは動物風景だけではなく、北フランスのエトルダの海岸で描いた海景までもとひそかに期待しています。あなたの芸術と人生の原風景に接近して五年間が過ぎましたが、このようなあなたの結晶に直接出会うことができ感銘を深くし、改めて「クールベさん今日は」という言葉で作品歓迎の意を表したいと思います。それではこの辺でペンを置きます。

＊　＊　＊

展覧会案内

常設 収蔵作品展

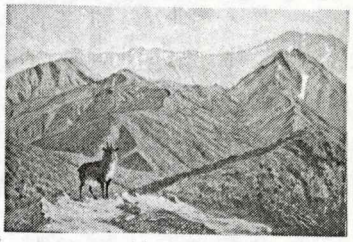
本展は、館収蔵作品を、随時、展示替えを行ないながら公開している。本年度は四月二十五日(土)からの開催であるが、特別展、県芸術祭等予定のため、九月六日(日)で一時終了し、昭和五十七年一月二十二日(金)から再度開催する。今回の内容は新収蔵作品を中心に、当面、十四作家、三十八点を展示している。その他、資料コーナーを設け、写真やパネルなどを使用して、浅井忠の業績の一端を時代を追って紹介している。



石井柏亭「聖フランチェスコ寺院」

展示作家

展示作家は、明治から昭和に及んでおり、その他、外国作家で十九世紀フランス写実主義の代表的画家クールベ(一八一九―一八七七)を取り上げている。作家を順次紹介すると、明治期では、江戸の佐倉藩邸で生まれ、日本近代洋画の先覚者として多大な功績のあった浅井忠(一八五六―一九〇七)が挙げられる。近年まで活躍した作家では、浅井忠に学び、二科会、日本水彩画会、一水会などで主要な位置にあり、優れた美術評論も多く残した石井柏亭(一八八二―一九五六)、また、同じく浅井忠の指導を受け、二科会、一水会などを舞台に、写実精神に貫かれた作風で、現代洋画壇をリードした安井曽太郎(一八八八―一九五五)、そして帝展、文展、日展で活躍し、国内外各地を描き続けた日展会員で日本山林美術協会代表の鶴田吾郎(一八九〇―一九六九)らがいる。さらに、松戸市に生まれ、渡欧し、独自の画風を求めて努力を続け、将来を嘱望されながらパリの地で夭折した板倉鼎(一九〇一―一九三九)の作品も展示している。その他、水彩画新開拓の中心的存在となり、近代的造型性に富んだ作品を描いた中西利雄(一九〇〇―一九四八)と小堀進(一九〇四―一九七五)、版画家では、八千代市に在住、日本版画協会、国画会に所属して国際的にも活躍し、独自の木版画の世界を築いた星襄一(一九二三―一九七九)の作品を展示した。



鶴田吾郎「朝日連峰」

現在活躍中の作家としては、鶴田吾郎の息子で川端龍子に日本画を学び、日本画府の専務理事をつとめ、同展に作品発表を行なっている鶴田熙(一九二七)のほか、本県在住の作家四名である。船橋市に在住し、新象作家協会創立委員で日本水彩画会会員の熊谷文利(一九二〇)、市川市に在住し、現代の裸婦展大賞などを受賞した松澤茂雄(一九二九)、八千代市に在住し、光風会会員で日展特選などを授賞した高橋規矩治郎(一九三〇)、習志野市に在住し、シェル美術賞展一等を受賞した久保木彦(一九四八)、以上である。

中西利雄「四人の女」

展示内容

●油彩作品

クールベ「雪の中の小鹿」、石井柏亭「老太々」「聖フランチェスコ寺院」、安井曽太郎「熱海附近」、鶴田吾郎「蒙古の女」「朝日連峰」「杣夫」「谷川岳」「小鳥たち」「山神」「お山の鈴音」、板倉鼎「静物」「金魚」、熊谷文利「佳境に入る女」、祈禱師」、松澤茂雄「海辺の裸婦」、高橋規矩治郎「漁船」、久保木彦「鉄路の信号ボックス」

●水彩作品

浅井忠「フォンテンブローの森」、石井柏亭「病児」「舟に居る人」、中西利雄「外房風景」「四人の女」「曇り日の離宮と駅」、小堀進「霞ヶ浦」「南欧の丘」「山」「花と海」

●版画作品

星襄一「星の森(大)」「青い一列」「大樹」「枝繁る(赤)」「枯草の風景(B)」

●日本画作品

鶴田熙「夕曠」

●彫塑作品

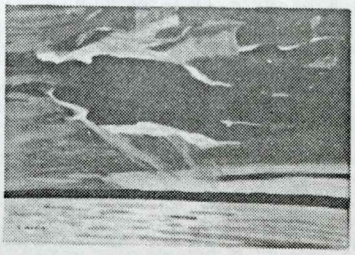
浅井忠「お福の像」「蟇仙人像」

●工芸作品

浅井忠「猿蟹合戦図茶器」「向付皿」「花瓶」

●資料

●浅井忠関係…日記、教科書等出版物、スケッチブック、絵葉書、図案、写真、その他



小堀進「霞ヶ浦」

新収蔵作品紹介（I）

購入

星襄一作「星の森（大）」（昭和四十六年）「青い一列」（昭和五十一年）「大樹」（昭和五十二年）「枝繁る（赤）」（昭和五十三年）「枯草の風景（B）」（昭和五十三年）

作者の星襄一は、大正二年（一九一三）新潟県に生まれ昭和五十四年（一九七九）六月六十四歳で病没している。

樹木を繊細に描く木版画として独自の世界を築き上げ、日本内外の数多くの版画展に入選、受賞し活躍した。

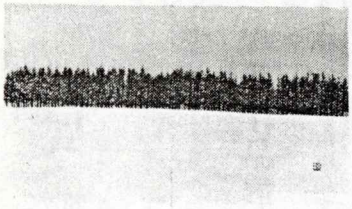
亡くなった年の十一月に出版された『星襄一自選作品集』の冒頭に、星は自身の作品と創造の変遷について次のように記している。「はじめの数年間はいわゆる抽象様式を手がけておりましたが、やがて絵は誰にもまずわかって頂かねばならないという反省から徐々に抽象的表現から離れつつ自分の道を模索してきました」。四十二歳で武蔵野美術大学西洋画科を卒業した星は晩成の版画家の道を歩み始めた。その頃の作品は、白と黒を主とした抽象的なものが大半であった。これは書に対する興味と当時のアブストラクトへの流れに身をおいた結果であった。その後、ひとつのモチーフを求めて動き出す。すなわち、「何を描くか（何を言いたいのか）―何かあるのだがはっきりと姿を現わしては来ない、その漠としたものの周りをさまよっていますうちに、題材はいつか一つの傾向をとって、ある時期からしばらく星が続き、やがて地平線、そしていまの樹木のしごとへと移って参りました」と述べている。自身の訴えや祈りのようなものが、永遠なモチーフ―星と星座―として表現される。「自分の心の中の訴えや祈りは……限りあるいのちの人間が……なにか永遠のあるものに訴えかけるわけでして、こんどは、その祈りをささげているちっぽけな人間というものが、とても哀しく、おーい仲間と呼びかけたいような……人間への郷愁とでもいったものを感じさせるのではないでしょうか。」星座をモチーフとしたのは、単に自分の苗字からであったとも言われるが、この郷愁は、さらに樹木へと展開されていく。「最近の題材である樹木について申すならば一本の木でも木立でも森でも思い浮かべるだけで胸に響いてくるものがあって、その湧き上がる心象を樹と風景につくっていくということになります。従って、特定の、あるいは具体的な樹を描くわけではなく、あくまで私の樹に他なりません」。さらに昭和五十一年五月号の『Vision』に「名木や巨木でなくとも、そこらのどんな木にも心に通うものはあるし、作品の題材たり得るわけだけれども、やはり星霜を経た大樹を前にした感動は格別である」と、樹木へのこよなき愛を記している。樹木こそ星にとって自分の訴え、祈りを表現する最適なモチーフであったといえよう。そして、描かれる樹木は、みな孤独であり禁欲的である。これは画面で余分なものを思い切って捨てさった余白によるものと思われるが、同時にその余白が日本画にも似た雰囲気をかもし出し、モチーフとの間に微妙な緊張感を創み出している。

また星の木版画は、焙で彫り口をソフトに仕上げる独創的な技法に支えられたものであり、地色として置かれた金箔等も星の画面を特色付けている。

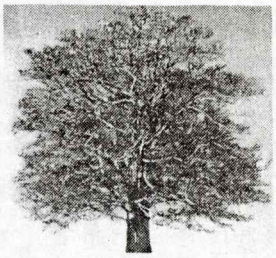
静寂さの中に漂う繊細な抒情の世界に魅了されることでしょう。

＊　＊　＊

なお、前年度購入の新収蔵作品は本欄で順次紹介します。



星　襄一「青い一列」



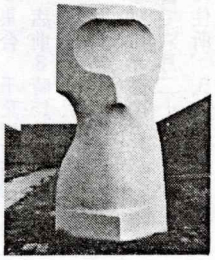
星　襄一「大樹」

五十五年度寄贈作品

昨年度次の資料が寄贈されました。厚くお礼申上げます。

西田葆氏より
高橋規矩治郎「漁船」
久保木彦氏より
久保木彦「鉄路の信号ボックス」
㈱日本フランコニーより
立石春美「矢がすりの娘」
熊谷文利氏より
熊谷文利「薬を飲む祈禱師」
鶴田熙氏より
鶴田熙「夕曛」他一点
小堀昭氏より
小堀進「花と海」「セーヌ川」「ロンドンの朝」他六点
中西富江氏より
中西利雄「外房風景」
鶴田熙氏より
鶴田吾郎「憶ひ出の広安門」「女」「杣夫」「木をつくる」「富士山」「朝日連峰」「鷹の巣の雪山」「谷川岳」他四十二点
木村賢太郎氏より
木村賢太郎「海」関係資料二点
河村一夫氏より
浅井　忠「絵葉書」、和田英作「絵葉書」、塚本靖(他)「水彩画」三点、日本帝国海外旅券、文様集成十三点、他一点

美の泉



日本の現代彫刻のウィークポイントは野外彫刻が乏しいことである。最近、ようやく野外彫刻展が催されたり、都市空間の中に屋外彫刻が見られるようにはなったが、それでも外国に比べると、まことにさびしい状況である。

美術館の西側入口に去年の五月に木村賢太郎氏の制作になる「海」というテーマの石彫を配した。高さ三・一メートル、重さ約十トンの白い花こう岩の大作である。

作者は本館の依頼により海に面した美術館にふさわしいものをと想を練り、池田二十世紀美術館に続いて周辺の自然環境の将来構想をも考慮に入れて一年がかりで制作したものである。

見る方向と角度によっていろいろと変化に富んだ展観ができる。鋭い切り込みとゆるやかなくぼみの連続、なめらかな石肌の中に彫り出された波紋様はテーマをほうふつさせるに十分である。

臨港公園が出来上れば、ここがメーンストリートになるだけに、いずれは美術館のシンボルとなることだろう。

木村氏は一九五二年、東京芸大を卒業、その後一貫して石彫と取りくみ、古典的な彫刻や単なるオブジェを超えた独自の造形を展開し注目を集め、数々の展覧会で受賞してきた。最近では一九七四年に中原悌二郎賞の優秀賞に選ばれている。

氏は現在、柏市にアトリエを構え制作活動を続けているが、本館には駐車場入口に立像があるほか、正面玄関受付のところに一九七五年制作の「うごめくトルソーⅥ」と題するほほえましい作品が展示されている。

（安増　順）

トピックス

このたび当館に、最近巨匠として再評価された鶴田吾郎の作品が、吾郎・四男の熙氏より多数寄贈されました。四月二十五日(土)より開催している「収蔵作品展」にその一部を展示しております。是非、御鑑賞ください。

鶴田吾郎は、明治二十三年生まれ、十五歳で倉田白羊の門下生となり、後に白馬会研究所、太平洋画会研究所で中村彝・中原悌二郎・広瀬嘉吉・長沼ちゑ（後の高村光太郎夫人）等とともに学んだ。以来六十五年にわたる画家としての歩みの中で、大半は写生の旅に費やされ、その行動範囲は日本全国ばかりでなく、アジア、ロシア、ヨーロッパにまで及んだ。

鶴田吾郎にとって絵画とは、写生を意味し、ミレーのように自然を愛することに原点があった。そしてその絵画的真価は、対象物の息吹きを瞬間的にとらえたデッサンの確かさにあった。

伝言板

特別展入館料を免除

■今年四月一日より来年三月三十一日まで本館で開催される特別展観覧に際し、次の該当者は入館料が免除されるのでご利用ください。

1 身体障害者手帳配布対象者
（但し第一級身体障害者については介護者も免除）
2 療育手帳配布対象者
3 博物館利用促進事業協力校であり、博物館利用促進事業の一環として学校長より申し込みを受け、教師の引率の下に観覧する場合
4 千葉県発行「長寿のしるべ」配布対象者

○但し1、2、4の場合は入館の際当該手帳の呈示を求めるものとする。

○なお、当日手帳を持参していない場合でも明らかに該当すると思われる場合も同様の取り扱いをする。

■美術館友の会では、本年度の会員を募集しています。

なお詳細は美術館友の会事務局にお問い合せ下さい。

入会金　五〇〇円
会費（年間）一五〇〇円

職員異動

昭和五十六年四月一日付で次の職員が異動しました。

■退職者
山越司久（学芸課）
袴田常夫（学芸課）

■転出者
鵜之沢康雄（教育庁文化課へ）
川野　仁（教育庁印旛地方出張所へ）
田坂　浩（教育庁文化課へ）
川島利道（教育庁文化課へ）

■転入者
大久保　守（県立房総風土記の丘より）
一杉　徹（教育庁福利課より）
山内章子（新採用）
小泉幸代（新採用）
松本　衛（嘱託）四月九日付

退職、転出者の労をねぎらうとともに、新しい職員の今後の活躍を期待します。

（館内異動）

高橋　瑛（普及室長より学芸課長へ）
高木　正（研修班長より普及室長へ）

◎美術鑑賞の旅参加募集

第13回千葉県立美術館友の会バス旅行は、写生地としての房総に視点を置き、多くの著名な作家が訪れ、宿泊した太海（江沢館、仁右衛門島、フラワーセンター）やその近郊を巡り、さらに、千葉県立総南博物館を訪れ、美術、歴史、自然を堪能する機会であり、会員の皆さま相互が親睦を深める場でもあります。

1 期日　六月二十八日（日）晴雨にかかわらず
2 利用乗物　観光バス（2台の予定）
3 募集人員　百名程度
4 参加費三千円（予定）
5 見学地　江沢館（画家の宿）、仁右衛門島、フラワーセンター、誕生寺、千葉県立総南博物館
6 集合　千葉相互銀行本店前8時15分、解散国鉄千葉駅前17時30分（予定）

参加御希望の方は、往復葉書で六月二十日（土）までに住所、氏名、電話番号会員番号明記のうえ、お申込みください。定員になり次第締切ります。なお、会費は乗車の際いただきます。

◎洋画研修講座

●期日　5月30日・31日　6月27日・28日　7月4日・5日
●講師　武内和夫氏
●定員　30名

◎陶芸入門講座

●期日　6月4日・5日　6日・7日
●講師　三橋英作氏　横山光ノ介氏

お知らせ

●定員　30名
※各講座とも実費自己負担
期日については、やむを得ず変更する場合もありますので予め御了承下さい。
申し込みは、各講座とも往復葉書にて、講座名、住所、氏名、電話番号、友の会員は会員番号明記のうえお願いします。
なお、詳細については電話等で研修班にお問合せ下さい。
※皆さまに大変ご迷惑をおかけしています本年度の実技講座については、六月まで決定しております。
なお、七月以降の講座については、前年度に準じて計画をすすめておりますので、確定次第、館報、館内掲示板等によりお知らせする予定です。

◎団　体　展（5月～7月）

●日本教育大学協会第2部会書道部門教官作品展　5・26～5・31　無料
●第4回一陽会千葉支部展　6・2～6・7　無料
●第12回表美展　6・2～6・7　無料
●千葉県書道協会展　6・9～6・14　無料
●新槐樹社千葉支部展　6・9～6・14　無料
●第2回千葉全展　6・16～6・21　無料
●第5回墨の県展　6・23～6・28　無料
●第4回精鋭展　6・23～7・5　無料
●千葉書壇秀抜展　6・30～7・5　無料
●第5回千葉美術シンポジウム展＆青柩展　7・7～7・19　無料

来館者

2月
3 上野の森美術館事務局長
4 国立国際美術館長
10 千葉市教育委員会社会教育課一名
16 柏市教育長他一名
18 群馬県文化事業団文化部三名
23 福島市長他二名
25 福島県いわき市総務部職員研修所十三名
28 京都市美術館二名

3月
12 一宮市教育委員会二名
13 兵庫県立近代美術館一名
14 神戸新聞社から作品借用のため来館
18 郡山市教育委員会事務局六名　新潟市教育委員会一名
21 千葉市長他十名、千葉市民展を観覧
松山市教育委員会次長
松山市立子規記念博物館二名

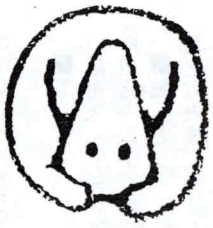
4月
3 清真会同人二十三名
11 友納武人衆議院議員
23 柏市教育委員会二名

日誌抄

2月
4 県博物館協会第四回編集委員会
15 洋画基礎講座（最終日）
28 七宝焼入門講座

3月
3 美術館協議会
4 第二回県博物館職員研修会
7 ボランティア研修会
美術を語る会（講師戸田健夫氏）
24 洋画研修講座（二十五日まで）
28 てん刻入門講座

4月
1 辞令交付　離着任式
25 友の会役員会



浅井　忠自作印